

開拓の群像(一)

中川 亀 太

☆サロマベツ原野、

農業開拓の草分け

☆鐘沸村〔佐呂間村〕独立へ奔走

◎北海道開拓の時代的背景



中川 亀 太

明治四年九月十四日、徳島県那賀郡福井村で、中川武二郎の長男として亀太は生を享けた、その青年時代の我が国は、維新の大変革の激震に大揺れの時代であった。

外には西欧列強が東アジアへの進出とロシアの極東進出策などに対し、明治政府は軍備増強への増税を「地租」として強徴し、明治二十三年には、地租の総額が、国税総額中六

十パーセントを越える大増税を強行したのである。

又頃を同じく日本の資本主義の創成期でも有り、農村では幕政時代からの階級そのまま、地主の苛酷な年貢の収奪が強行、水稲を耕作しながら米のご飯を食べることが出来ない悲惨な状況や、高利貸しは容赦なく証文を振りかざして差し押さえを強行、官憲もまた困民には冷たく、群馬事件や秩父事件を始め各地に暴動や一揆が起こった。

このような政治を変えようと自由民権運動が起こり、政府は困民暴動の制圧と共に、自由民権運動の弾圧に乗出し、加波山事件や福島事件など、各地で活動家や有能な志士を捕え投獄、ろくな裁判もせず、その多くが北海道へ流刑に処し、自由民権運動の撲滅をはかったのである。

当時は全国の農村いや社会全体が極端な貧富に分かれ悲惨な状況であったから、犯罪も多発したが、自由民権運動や困民暴動の逮捕者など、北海道へ送り込まれた者は毎年数千人にも達し、明治十四年から二十年代中頃までに、樺戸、三笠、釧路、網走などに大規模な強制収容所〔監獄〕を建設し、石炭、や硫黄の採鉱、道路開削、石炭搬送の鉄道建設などに、悲惨極まりない奴隷的重労働を課し、国費の節減で北海道開拓を急ぐと共に、民権思想の志士を国事犯として、北海道開拓の人柱としたのだ。以上〔中央公論社日本の歴史〕

◎北海道十勝国へ

中川亀太明治三十二年、生れ故郷を後にして、十勝の国十勝郡生剛村〔現浦幌〕に移住した、封建時代嫡男を捨て、「極寒の原始林に熊が咆哮する流刑の地」、当時はこんなイメージの北海道を目指し単身旅に出たのだ。亀太の生涯の生き方から、当時の農村の状況、世相の中で、或いは自由と開放を求め、進取と希望に満ちたもので有っただろう。

国有未開地処分には独身者には貸付けが許可されなかったため、多分同郷の人達の渡道と連れ立っての移住で有ったのであろう。

北海道の開拓は明治以前から、道南方面から和人の侵入が、次第に道央へと進み、又、ロシアの千島南下の対応も有り、釧路、厚岸根室なども維新前から多数の警備の役人など和人の入込みがあった。

十勝地方は、明治十六年伊豆の人依田勉三が、晩生社を造り十三人を連れて帯広に来住し、開拓を始めたのが稿矢と言われるが、十勝地方の植民区画整理は、明治二十九年に測量され、開拓が本格的になったのは三十年代であるから、亀太は海岸に近い浦幌に入植したのであろう、三十三年に結婚をして、同三十六年五月、サロマベツ原野仁倉へ移住したのだが、当時は十勝から北見地方へは路らしい路が無く、たまたま国鉄釧路線〔根室本線〕が、明治三十三年四月、浜釧路から帯広へ向けて着工され、同三十六年春には浦幌近くまで開通して、次々と営業を開始したので、釧

路まで汽車に乗って、釧路から標茶一弟子屈―小清水―網走までは、十年以上前に囚人の重労働で路が開削されて居たので、駅通を頼って馬を借りたり、徒歩での移住であった。

(北海道鉄道百年史)

◎サロマベツ原野開拓の先駆

サロマベツ原野の植民区画は、明治三十四年二月告示されて居たが、腰を据えた農業開拓の定着は無く、同じ時に来住した吉川久太郎と共に本町農業開拓の草分けであった。

亀太は当初、サロマベツ原野八線三十六番地と、隣接地も合わせて六町三反歩の貸付許可を受けて来住したのだが、あまりにも条件が悪く、止むなく吉川氏の近くの仁倉川添いの、十線四十五番地を開拓する事とした。

亀太は体格に恵まれず五尺足らずの小柄な身であったが、持ち前の根性で原始林の大木に挑み、次第に耕地を広めていった。

◎戸長役場と総代人制度

中川と吉川が来住した明治三十六年以来、急速にサロマベツ原野全域に次々と農業入植者が来住して、戸数も明治四十年には三百戸に達する程になった。

北海道は明治三年に開拓使を札幌に設置して、同四年には行政区画を決め、同五年戸籍法の制定に伴い、戸長制度が布かれた。

当時、北見地方には若干の和人が寄留するのみで、住民の殆どがアイヌ人で有ったが、

すでに四郡に区画され、常呂川流域と、サロマベツ川流域を常呂郡とし、七つの村に区画されて、サロマベツ川流域は鑑沸村として、常呂村外六ヶ村戸長役場の管轄とし、明治十六年常呂浜に戸長役場が設置されて居た。

鑑沸村〔本村〕の住民は、子供の出生届を始め、戸籍や証明などの手続きには常呂川口の役場迄、徒歩か乗り馬で往復しなければならず、特に上佐呂間や武士、栃木方面の人は二日がかりになり、開拓の忙しさに追われ、つい届け出が遅れて、中には次の子が出来るとして、慌てて出生届をするなど、多くの不都合に堪えていた。

亀太は仁倉で、時折上流地域から常呂役場まで、小走りで急ぐ人々の姿を見て、何とかしなければと、心を痛めていた。

◎総代人制度

戸長制度が布かれて郡や町村の行政面で、戸長を輔け、住民の利害得失に注意し、共に税の事や公共事業の推進などの為、総代人制度が、明治九年に布告された、北海道では同十一年に制定したが、十五年に府県にならって全道を三県に分割したから、この地方には、同十六年六月、根室県令から改めて布達されて居た。

その制度は十ヶ条の「選挙法」と、十三条の「総代人心得」から成り、その概要は、郡総代人も町村総代人もそれぞれ一名乃至二名の定員として、その倍の数を選挙し、任期を

二年と決め、毎年半数を選挙するもので再選を妨げないものとしている。

又、「心得」では町村の子算の編成や税の賦課、公共事業の執行の面、更に公共財産の増減までも任務として居り、戸長の諮問に意見を議す、として、その権能は可成り大きいもので有った。

〔道立文書館保存資料から〕

然し常呂郡地域では、明治二十八年に下常呂に高知団体、三十年に野付牛に屯田兵と北光社、三十一年に岐阜団体の下常呂移住、など三十年代になり漸く戸長役場の活動が忙しくなってきた。

常呂村外六ヶ村の総代人について、資料不足で明らかでないが、当時は現在の栄浦をトーフツと呼び、湖口が有って、莫大なカキの生息が有った為、昔からのアイヌ八戸の部落も含め、明治二十九年には、二十六戸百十七人も集落が形成されて居たので、サロマベツ川流域に富武士も含め、トーフツ村と名付け、後漢字に統一されて鑑沸村となった。

鑑沸村の総代人は、明治三十四年から選出されて居るが、同四十年頃までは、トーフツの住人ばかりである。次第にサロマベツ原野への植民が進み、戸数の増加を見るにいたり、大正二年には、中佐呂間の橋三次郎と共に中川亀太が、鑑沸村の総代人となつて居ります。何年に中川が総代人に選任されたのか、資料不足で明らかでないが、佐呂間町史によれ

ば、トーフツの島崎梅蔵が明治四十一年九月に任期満了後は、中川と橋の両名の名前が書き記されて居る。

当時、中川は三十八歳だったが、サロマベツ原野の開拓民の状況の中で、一緒に来た吉川の強い支援もあり、敢えて立候補して総代人となったのであろう。

◎ 鑑沸村の独立に奔走

中川が来住して十年、大正二年には戸数一千二百五十戸を超え、人口も四千三百を超えて、経済力も納税額も常呂村と遜色なき程になった、而し戸長役場が遠く、多くの村民は行政、教育、あらゆる面に不便を強いられていた。

中川はこの年の三月、最愛の妻が九歳を頭に四人の幼子を残して他界して、悲しみに沈んで居たが、村民の福祉と、村の将来への基礎造りのため立ちあがり、おなじく総代人橋三次郎と共に、戸長役場を新設して鑑沸村を独立、そして二級町村制の実現を期すべく、多くの村民とともに運動を展開、長文の請願書をしたためて、時の北海道庁長官中村純九郎に認可を強く請願したのである。

その甲斐あって、翌三年三月二十二日、鑑沸戸長役場設置が告示されたのである。

当時、網走支庁では、常呂村外四ヶ村を、そのまま二級町村制にしようとの案を考えて居たと言われる状況の中で、中川、橋両名の努力と功績に感謝を捧げたい。

大正四年四月一日、待望の二級町村制が施工され、村名を「佐呂間」と改めて、初代村長に高橋栄昭が任命された。

同時に総代人制度に代わって村議会議員制が布かれて、同年四月第一回の村議会議員の選挙が行われた。中川亀太は第一回から立候補して連続十回当選、三十年の長期に亘り創世期の村政の基盤固めに全力を注いだのである。

開拓当時の新墾地は、無肥料でも驚くほどの収穫があったが、次第に地力が減退し、道庁も有畜農業を奨励した。

大正中期に本町にも乳牛が導入されたが、亀太も仁倉地域を思い、昭和二年に仲間七名を誘い乳牛を導入、畜牛組合を設立して、翌三年には自宅の近くに集乳所を設置、自ら手回し分離器を回して先駆的努力を注いだのだ。

中川亀太は家庭的に恵まれない中で、只管村や地域住民の為に労を惜しまず、サロマベツ原野開拓の草分け、そして本町自治の開祖として大いなる足跡を残しながら、一九四五年（昭二十）十一月二十七日、七十四歳で他界したが、入植以来四十二年の歳月の大方を公に費やし、七十四歳でこの世を去った。

地域住民一同、中川翁の逝去に、深い悲しみの中で、翁の偉大な功績に感謝を捧げ、冥福を祈った。

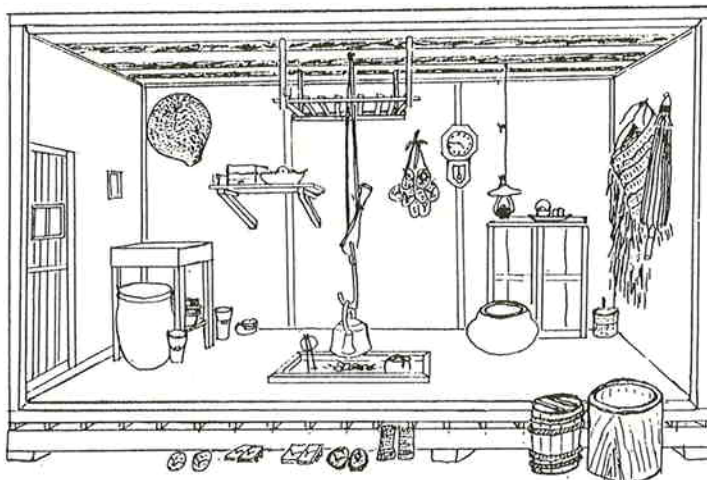
一九七三年（昭四八）十月、仁倉自治会は、開基七十周年式典に於いて、吉川久太郎と共に、「開拓特別功労者」として表彰し、永く

その大きな功績を顕彰する事とした。
ここに開基百年の記念に、郷土開拓の功労者、中川亀太の偉大なる生涯を書き印して置きます。

一九九四年十月

〔文責室井四郎〕

協力 津田市蔵、岡田仙太郎
資料 中央公論社の日本の歴史
佐呂間町史、仁倉部落史



開拓者がこの絵のような台所のある住宅が出来たら成功の人